

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 22 日現在

機関番号：12603

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770144

研究課題名(和文) 記憶領域のモデル化に基づくシベ語文法の研究

研究課題名(英文) Studies on Sibe language based on a modelling of the memory domain

研究代表者

児倉 徳和 (Kogura, Norikazu)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・助教

研究者番号：70597757

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本課題では言語主体の記憶領域で行われる情報・知識の処理についてモデルを仮定し、シベ語の文法要素の記述・分析を行った。そして、主に(1)意志を特殊な種類の知識と見ることにより、話し手の非意図的行為を表す補助動詞 aci-, dudu-, seNda- の意味を体系的に記述し、また話し手の意志を表す動詞接辞 -mi との組み合わせが可能なモダリティの制約に説明を与えることができること、(2)情報・知識の処理や記憶領域内での状態変化に要する時間を仮定することにより、モダリティを表す要素が副次的に持つテンス的性質に説明を与え、シベ語のテンス・アスペクトを体系的に記述できること、の2点を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In the present project, the reporter conducted studies on the Sibe language, based on the mental processing of information and knowledge that occurs within the memory domain of cognitive functions. The main results are as follows: (i) The semantics of auxiliaries aci-, dudu-, and seNda- and the constraint on the combination of the verbal suffix -mi, which expresses a speaker's volition, and other modal elements, are structurally revealed when the speaker's volition is assumed to be a particular kind of information or knowledge; and (ii) the tense-aspect system of Sibe is structurally revealed when the time-cost for processing information or knowledge and changes in the mental state of information or knowledge in the memory domain are considered.

研究分野：言語学

キーワード：シベ語 記憶領域 モダリティ 意図 知識 補助動詞

1. 研究開始当初の背景

シベ語 (錫伯語、Sibe) は中国・新疆ウイグル自治区で話される満洲 = ツングース諸語の一つである。本研究課題はシベ語の文法要素、特にモダリティに関わる要素について、共時的な意味の体系的記述と、モダリティ体系の通時的発展の解明を目的とした。

本研究課題では、モダリティに関わる要素の意味を論証可能な形で分析・記述するために、言語主体の記憶領域と、そこで行われる情報・知識の処理について、先行研究に基づくモデルを仮定し、そのモデルに基づいて記述・分析を行った。モデルは日本語の証拠推量表現を扱った齊藤 (2006) により提案されているモデルを基にし、発話参与者 (話し手と聞き手) の記憶領域を、命題が知識としてデータベースの形式で格納された領域 (知識データベース) と、外部情報と既存の知識が処理のために一時的に格納される領域 (バッファ) からなるものと仮定した。また、外部の情報知識が知識データベースに取り込まれる際には、当該の情報知識はまずバッファ領域におかれ、知識データベースから読み出された関連する知識との間で矛盾がないか照合されるなどの処理を受けると仮定した。このモデルに基づくと、本研究課題で分析の対象とするシベ語のモダリティ形式は、命題が記憶領域内で受ける処理 (知識データベースへの書き込み、知識データベースからの読み出し、バッファでの照合の有無、矛盾が生じた際の処理) を指定するといえる。

本研究課題に先立ち、児倉 (2013) では、シベ語の動詞 (直説法) の形態を表 1 のようなアスペクト接辞とモダリティ接語の組み合わせとして形態論的に分析し、齊藤 (2006) の枠組みに基づき意味機能を分析・記述している。

表 1 動詞のアスペクト接辞とモダリティ接語の組み合わせ

		=i	=ngge	なし
非現実		-mi	-re=ngge	-re
現実	非完了	-maxe=i	-maxe=ngge	-maxe
	完了	-Xe=i	-Xe=ngge	-Xe

表 1 において、アスペクト接辞は非現実・現実というムードと、非完了・完了というアスペクトの対立からなっている。また、モダリティ接語 =i、=ngge は節に付加され、=i は節の表す命題が知識データベースへ書き込まれる、=ngge は節の表す命題が知識データベースからバッファに読み出されるという処理を表す。モダリティ接語は節に義務的に付加されるわけではなく、モダリティ接語が付加されない形式は、知識データベースへの命題の書き込みと、知識データベースからの命題の読み出しという知識データベースに関わる情報の処理がないことを表す。

知識データベースへの書き込みの有無と

いう特徴は、実際の談話では、=i の後続する形式 -mi、-maxe=i、-Xe=i がいずれも聞き手に対する情報伝達の機能をもつのにに対し、モダリティ接語が後続しない-re、-Xe は情報伝達には用いられず、専ら独り言や感嘆を表す状況で用いられるという機能的特徴として観察される (なお、-maxe は文末に用いられない)。

児倉 (2013) はまた、他の動詞や名詞、形容詞に後続してモダリティを表す補助動詞 bi- (ある・いる)、o- (なる)、yela- (立つ) の意味機能についても分析と記述を行っている。児倉 (2013) によればまず補助動詞 bi- は話し手自身の知識データベースに関わる情報の処理を表す。補助動詞 bi- も一般の動詞と同様にモダリティ接語を取り (このとき補助動詞 bi- はアスペクト接辞として完了の -Xe をとり biXe となる)、接語 =i が後続した biXe*i* は話し手の知識データベースへの情報の書き込みを表し、実際の談話では話し手が新たに発見した事柄を表す。補助動詞 bi- (biXe) に接語が後続しない形式 biXe は話し手の知識データベースへ関わる処理がないことを表し、実際の談話では話し手自身が覚えている事柄を聞き手に対し確認し、思い出すよう促す機能をもつ。

モデルで仮定しているように、知識データベースに新規の情報書き込まれる際には知識データベースに既存の知識との照合が行われる。このとき、もし新規に書き込まれる情報と既に知識データベースに存在する知識が矛盾する場合は、いずれか一方が棄却されうると考えられる。これは実際の談話では矛盾する情報・知識の一方が否定されることに対応している。例えば「日本の首都は東京である」という知識を持っている聞き手が「日本の首都は京都である」とあるという発話を聞いた場合には、聞き手の心的領域ではどちらの情報・知識が正しいかを照合・判断し、誤った知識・情報を棄却する (この例の場合「日本の首都は京都である」を誤っているとして棄却する) と考えられる。

この処理は 2 つの情報・知識が矛盾する場合に行われる無標の処理であると考えられるが、シベ語においては、これに対し有標の処理が存在し、補助動詞 o- と yela- はこのような有標の処理を表す。具体的には上の例において、「日本の首都は京都になった」「日本の首都は一時的に京都である」というようにどちらも棄却せず、矛盾が解消されるように命題の内容を変える、という処理である。

2. 研究の目的

本研究課題では報告者が齊藤 (2006) の提案するモデルに基づき、モダリティ接語 =i、=ngge と補助動詞 bi-、o-、yela- の意味機能を分析した児倉 (2013) を受け、シベ語の文法をより体系的に記述するために、同様の枠組みでの他の文法要素の記述・分析を試みた。本研究課題での分析・記述の対象として、

まずすでにこれまでの予備調査により分析の目途が立っている補助動詞の aci- (動く / ~しだす)、dudu- (横になる / ~しまくる)、seNda- (放つ / ~してしまう) を扱った。補助動詞 aci-、dudu-、seNda- は、それぞれ開始、継続状態、終結という動的事態の特定の局面を表すというアスペクト的特徴のほか、話し手の意図的な行為に用いられないという共通点を持つ。報告者の予備的調査から、aci- を語彙的に事態の開始を表す動詞 diriwe- (始める) と比較すると、話し手自身の行為以外を表す場合に、diriwe- が話し手自身が生起すると予測済みの事態に用いられるのに対し、aci- は予測していなかった事態に用いられるという違いが存在することが分かっている。このことは「話し手の意図」と「話し手による事態の生起の予測」が aci- の使用の条件において繋がっていることを示唆する。本研究課題ではこのことを手掛かりに、まず補助動詞 aci-、dudu-、seNda- を発話参加者の記憶領域の状態変化のモデルに基づき分析を試み、モデルの有効性の検証と精緻化を行った。

3. 研究の方法

本研究課題で研究に用いたデータは、中国・新疆ウイグル自治区イーニン市において行った現地調査により採録されたものが中心とし、必要に応じ国内のシベ語話者を対象とした調査により補完した。データの種類としては、母語話者の判断を得た作例と、談話における使用を見るためのテキスト資料を組み合わせている。特にテキスト資料について、本研究課題では言語主体の記憶領域の状態変化という心理的な側面を扱うために動画の形式で記録し、ジェスチャーや視線の移動といったパラ言語的な情報とテキストをリンクさせた形式の資料を採録し、書き起こし等の処理を行って分析を行った。

さらに、報告者が参加していた他のプロジェクト(アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「日本語のノダに類する文末表現標識の通言語的研究: 思考プロセスの観点からのアプローチ」)では、話し手の思考を文脈として適切に設定するためにマンガ形式の調査票を作成し、調査を行ったが、この調査で得られたデータも一部利用している。マンガ調査票方式の調査では、話し手の内的発話をふきだしとして設定することで、本研究課題の採用したモデルにより仮定した情報・知識の処理のプロセスをより直接的に検証することができたと考える。

4. 研究成果

本研究課題の主要な成果は以下のようにまとめられる。

(1) 意志と知識の関係: 当初の計画通り、補助動詞 aci-、dudu-、seNda- について調査を行い、これらの補助動詞は共通して話し手自身の動作行為を表す場合には話し手 = 主

語の非意図的な動作行為を表し、話し手以外の動作行為を表す場合は主語の意図性の制約ではなく、話し手の予測しない動作行為を表すことを明らかにした。そしてこの現象の齊藤(2006)のモデルへの位置付けを行い、話し手の意志は、行為に先立って事態の生起に関する情報と同様の形式で知識領域に書き込まれる、と結論付けた。

補助動詞 aci-、dudu-、seNda- の分析からは、意志が記憶領域に知識の一種として扱われているという仮説を立てることは可能であるものの、意志が知識としてどの領域(知識データベース、バッファまたはそれ以外)に存在するのかを検討することはできなかった。そこで記憶領域において意志がどのように扱われているかを検討するため、さらに re=ngge について分析を行った。

シベ語において動詞の非現実形は1人称主語の場合に話し手の意志を表すが、非現実形は文末において現実の2つの形式とは異なりモダリティ接語 =ngge をとることができない。このことから、シベ語において意志は他の非現実の事柄に関する情報・知識と同様、少なくとも知識データベースに読み出し可能な形では存在しない、と結論付けた。

(2) モダリティのテンスへの反映: 表1にまとめたアスペクトとムードに関わる接辞 -re、-maxe、-Xe は先行研究では過去(-Xe)と非過去(-re、-maxe)というテンスで対立すると記述されており、さらに過去を表すとされる3つの形式 -Xe=i、-Xe=ngge、-Xe のうち -Xe=ngge は他の2つと比べ遠い過去を表すと記述されている。この記述に対し、兎倉(2013)では、「過去」を表すとされている要素は実際には発話時に生起した事態を表すことも可能であるため、過去と非過去というテンスの対立ではなく、現実と非現実というムードの対立として記述したものの、-Xe=ngge が遠い過去を表すという記述について検討を加えるには至らなかった。そこで本研究課題では -Xe=ngge のテンス性について =ngge の表すモダリティからの説明を試みた。そして、=ngge が表す知識データベースからの読み出しが可能になるためには当該の知識が知識データベースに存在する必要がある、知識がバッファでの処理を経て知識データベースに登録されるためには事態の生起から一定の時間を要するためであると結論付けた。

(3) シベ語のモダリティ体系の歴史的形成: 表1に示した体系のうち、非現実については終止形と連体形がそれぞれ -mi、-re となり、終止形を連体形+接語 =i と分析できない。本課題ではこの原因を探るために歴史的な観点からの分析を行った。そして、終止形の -mi が歴史的には *-raN-bi (終止形現在+1人称単数、Nは後続の子音に同化し、この場合は m となる) という形式に遡り、

シベ語において終止形を形成する接語 =i が 1 人称単数標識 -bi に由来し、また、*-raN-bi から -mi への変化は規則的な音変化のほか、動詞語幹の短母音語幹への統一による、子音語幹と母音語幹での接辞の形態音韻論的交替の消失という要素がかかわっていると、-mi と -re の間にみられる共時的な形態論的不規則性が歴史的な変化に起因すると結論付けた。

(4) 分析の他言語への適用:シベ語の分析に用いた記憶領域のモデルを利用し、現代ウイグル語の文末詞 ghu, chu, 'e, de の分析のためのデータ収集を行った。

<引用文献>

児倉徳和、シベ語のアスペクト・モダリティ体系の研究 知識状態の変化にもとづく体系化、博士論文、2013、東京大学。
齊藤学、自然言語の証拠推量と知識管理、博士論文、2006、九州大学。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

児倉 徳和、シベ語の補助動詞 biXe と「思い出し」、九州大学言語学論集、査読無、36号、2016、129-146。

Kogura, Norikazu, On the form and function of the verbal suffix -mi (-mbi) in Sibe: Is it a vestige of subject agreement?, Proceedings of the 12th Seoul International Altaic Conference, 査読無、2015、23-33。

[学会発表](計10件)

児倉 徳和、シベ語の補助動詞 o- のテンポラリティとモダリティ、2016 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会、2017年3月30日、京都大学ユーラシア文化研究センター(京都府・京都市)。

児倉 徳和、錫伯語的情態系統(シベ語のモダリティの体系)、第1回シベ語言語文化国際会議、2016年10月27日、九州大学箱崎キャンパス(福岡県・福岡市)。

児倉 徳和、論錫伯語助動詞構成的意願性範疇(シベ語の助動詞により構成される意志性のカテゴリについて)、首届錫伯族語言与文化国際學術研討会(第1回錫伯族語言文化国際學術討論会)、2016年9月11日、伊犁師範學院錫伯語言文化研究中心(イリ師範學院錫伯語言文化研究センター)(中国・伊寧市)。

児倉 徳和、論滿語及錫伯語的動詞形態系統簡化(滿洲語とシベ語における動詞形態体系の簡略化)、国学与絲綢之路歷史文化研究国際學術討論会(滿学組)/第二届國際滿文文獻學術研討会(国

学とシルクロード歷史文化研究国際學術討論会(滿学セクション)/第2回國際滿文文獻學術研討会、2016年8月26日、馮其庸學術館(中国・無錫市)。

児倉 徳和、シベ語における意図と知識についての予備的考察、Luncheon Linguistics、2016年4月13日、東京外国語大学語学研究所(東京都・府中市)。
児倉 徳和、The use of auxiliaries in engagement in Sibe (Xibe), Symposium on evidentiality, egophoricity, and engagement: descriptive and typological perspectives、2016年3月17日、Stockholm University(スウェーデン・ストックホルム市)。

児倉 徳和、シベ語における Evidentiality と Reality —補助動詞 bi- 「ある」と o- 「なる」の分析から—、言語の対照および類型論的研究の会研究会、2015年5月15日、津田塾大学(東京都・小平市)。

児倉 徳和、錫伯語動詞後綴-Xengge 的語法効能及其時態、人称指称上の表現(シベ語動詞接辞-Xengge の文法機能とそのテンス・人称指示への現れ)、The third international conference on Tungus languages and culture、2015年8月10日、貝爾大酒店(中国・海拉爾市)。

児倉 徳和、ツングース諸語の動詞形態論における母音語幹と子音語幹の対立、2014 年度ユーラシア言語文化研究コンソーシアム年次総会、2015年3月27日、京都大学ユーラシア文化研究センター(京都府・京都市)。

児倉 徳和、シベ語の動詞接尾辞 -mi, -Xeи とツングース諸語における述語人称標示、日本言語学会第149回大会、2014年11月14日、愛媛大学(愛媛県・松山市)。

[図書](計0件)

[産業財産権]

なし

[その他]

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

児倉 徳和 (Kogura, Norikazu)
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・助教
研究者番号: 70597757

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者
なし

以 上